

浄土

monthly JODO

2014
April

4



法然上人讃仰会

2014
表紙のひと

花写



芝崎純子

撮影 Keizo S.

ヨーロッパフラワー連盟講師資格を取得し、
2007年から東京・港区白金台の自宅でフラワーサロンを主宰。
生花、プリザーブドフラワー・アーティフィシャルフラワーなど
ヨーロッパスタイルを基本のLesson開催のかたわら、
フラワーギフトアレンジを提案。
特に、仏事の供花を扱うブランド【花写】を立ち上げ、
生花に特殊な加工をして長期保存できる
プリザーブドフラワーの仏花ギフトアレンジに定評がある。
墓石用のアーティフィシャルフラワーのアレンジ等
仏壇の供花は、
一人暮らしで水替えが大変という年配の方々からも人気で、
手元供養で小さな花のアレンジを添えるのは、毎日の供養の際、
遺された方の心に穏やかさ優しさを与える、という。
法事やお盆、お彼岸など、また、お悔やみのフラワーギフトとして
注文も多く、いま各界注目のアーティストである。

花写 <http://www.ca-sha.net>

●今月号は浅井竜介氏の花器を使ったアレンジです。

寺院紀行

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

榎寺

東京・蔵前
かやでら



かやでら
榎寺（池中山盈満院榎寺・旧正覚寺）本堂と榎寺
第二十四世日比野郁皓住職



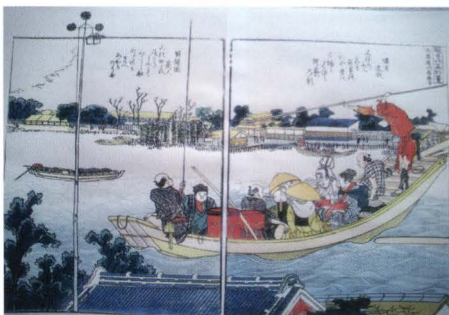
権寺の内陣



本尊阿弥陀如来坐像



米蔵が立ち並んでいたことから蔵前
という地名になった。それを示す石
碑が建っている



上が「権寺の高灯籠」と題された江戸時代の浮世絵で
原本版はボストン美術館所蔵。

下は江戸時代の絵と同じ場所から撮った写真



東京仏教青年会でネパールへ行った時の記念写真。
中央が日比野住職



素敵な笑顔が印象的な日比野住職

かやの木会館4階のホール。各種会合やイベント、展示会などにも使われている



かやの木会館3階ホール。正面には釈迦像が祀られている。浅草仏教界など通仏教の会合に使われることが多い

かやの木会館2階待合室。用途は様々



かやの木会館2階茶室。
取材当日もお稽古があった



昭和46年に建てられたかやの木会館は平成2年、16年に大改修された。当初から貸しホールを目的とした4階建てのビルで、葬儀場ではなかった

旧本堂前に聳えていた榎の木。第二次世界大戦で焼けたが、昭和63年に掘り出し磨いたもの



浄土

2014/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京 蔵前 榎寺	写真=タカオカ邦彦	1
新連載 法然上人のお言葉	梶村 昇 英訳 河西良治	6
被災地の現場から	藤田文亮	8
寺院紀行 東京 蔵前 榎寺	真山 剛	14
会いたい人 矢野誠一さん (上)	関 容子	22
響流十方	小村正孝	32
新連載 蓮門句会		36
江戸を歩く	森 清鑑	38
誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	51
編集後記		52
表紙・表紙裏=2014「浄土」表紙の人 【花写】芝崎純子		
背表紙裏=泰雲の美味探訪		



表紙題字=中村康隆元浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

はじめに

「ことばこそいのちをつなぐひかり」という詩人の言葉があります。事実、私たちは、言葉につながり、言葉に生かされております。八百年昔の法然上人の信仰思想も、上人の遺された言葉によつて今につながり、生きるいのちとなつております。この輪を広げ、より多くの方々と一緒に味わつていこうと思ひ、このたび英訳を加えました。これらのお言葉は、全法語の何分の一に過ぎませんし、なんの脈絡も体系もなく、ただ心に沁みたお言葉を羅列したただけのものです。これがご縁となり、時空を超えて心のつながりができれば幸いです。

Preface

A certain poet says that word is light that connects life. As a matter of fact, we are mutually connected and are allowed to live by words. Honen's religious thoughts eight hundred years ago have been passed on to the present day by means of his sayings, so that we are even now blessed with life by his words. I intend to translate his sayings into English in order for more and more people to enjoy themselves with them and widen their circle of connection all over the world.

The sayings that I select in this section are just a small number of Honen's and I do not aim at establishing a coherent and systematic collection of his words, but I attempt to quote and comment on some deeply impressive sayings at random. I hope that this English translation will be a good opportunity to connect hearts beyond space-time. (Ryoji Kasai)

法然上人のお言葉

1

て法語

1 一心に専ら^{もっぱら}弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近^{くこん}を問わず、念念に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に『選択本願念仏集』

現代語訳——心にひたすら阿弥陀仏の名を念じて、いつでも、どこでも、時間の長短を問わず、一念一念に思いをこめて申すのを、浄土に往生する正しく定められた行と名づける。これは阿弥陀仏の本願に適っているからである。

解説

これは上人の名著『選択本願念仏集』に述べられた言葉で、法然仏教の基本となるものです。法然仏教は長い日本の仏教史を前後に二分したといわれます。それまでの日本仏教が、現実を遊離した観念教学の展開でしたが、それを地に足をつけた実現可能な仏教にしたということです。しかもそれは独断ではなく、伝統の仏教教学に則ったもので、『選択本願念仏集』はそれを示したものです。

Commentary

This teaching was stated in his main literary work *Senchaku hongan nembutsu shu* and has become the very essence of his Buddhism.

Honen's Buddhism is said to have divided a long history of Japanese Buddhism into the two periods before and after it. Down to that time Japanese Buddhism had developed into idealistic learning divorced from real life. Honen admittedly changed it to practicable learning which is in touch with reality. The change is also not his own arbitrary decision but it follows traditional Buddhist's learning, as *Senchaku hongan nembutsu shu* demonstrates it.

Honen Shonin's Sayings

1 It is the right practice to attain birth into Amida Buddha's Paradise that people do nothing but earnestly call upon His name and do not fail to do so incessantly with the whole heart at any time and place in their daily courses of life, irrespective of whether it is done for a long time or not. Because the practice fulfils what Amida Buddha originally vowed.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

英訳……

河西良治

中央大学文学部教授、前文学部長
東京大学文学部大学院修了・英語学専攻

被災地の現場から

毎日新聞
京都支局
(前仙台支局)

藤田
文亮



あんなにも、海は遠いのに……（宮城県女川町で2012年3月4日）

「悲しみは消えることはありません。でも、この悲しみはあの子たちの存在そのものです。忘れる必要も、乗り越える必要もなく、いつもそばに感じていいのだと思います」

これは、東日本大震災で校舎の屋上を越える津波に襲われ、児童・教職員84人が犠牲となった宮城県石巻市立大川小学校の遺族が作ったホームページの一文だ。

震災はいまだ“発生中”

震災の犠牲者（死者・行方不明者）は2万1565人（今年3月10日現在）に及ぶ。万単位の日本人がひとつの出来事で亡くなったのは、第2次世界大戦の長崎への原爆投下以来のこと。リアス式海岸の湾奥部に町の中心があった宮城県女川町では、震災前の人口の約8・7%にあたる871人が犠牲になった。実に町全体の人口の11・5人に1人が犠牲になっており、町民全員が家族や友人など大切な人を亡くした“遺族”と言える。

犠牲者の数字は今も増え続けている。長引く避難生活の中、持病の悪化や新たに病気にかかり、亡くなる「震災関連死」が続いているからだ。犠牲者の内訳は、地震や津波で亡くなった「直接死」が1万5884人、「行方不明者」が2633人。これに、避難生活のストレスや疲れで、震災前からの病気が悪化したり、新たに病気になったりして亡くなった場合に認められる「関連死」の3048人が加わる。

震災から3年が経っても、全国で約27万人が避難生活を余儀なくされ、このうち約10万人はプレハブの仮設住宅に住んでいる。避難者の多い福島県では、関連死（1671人）は直接死（1603人）を上回った。地震と津波が起こったのは3年前だが、この一つを持ってしても、震災はいまだ“発生中”であることを感じることができる。

被災の現場・大川小学校

冒頭に引用させてもらった一文は、小学校6年生の娘を亡くした親が昨年11月に記した思いだ。昨秋までの1年半、仙台支局に勤務していた私は、冒頭の一文を記した父親ら大川小学校の遺族を含め、「なぜ我が子が死ななければならなかったのか」を問い続ける親たち取材させていただく機会があった。

大川小学校にはあの日、2階建ての校舎の屋上を越える津波に襲われ、全校児童108人のうち74人が、教職員13人のうち10人が犠牲に。今回の震災で、学校の被害としては最悪のものになった。

都市部のミッション系学校を思わせるようなモダンな校舎の窓々は吹っ飛び、鉄筋はむき出しになり、渡り廊下も阪神大震災時の高速道路のように倒壊している。校庭にあるコンクリート製の屋外舞台も津波で破壊されが、壁面には民族衣装を着た世界の子供が笑顔が描かれ、「世界が全体に幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」との宮沢賢治の言葉が添えられています。小学生の息子を持つ私は、この現場に足を運ぶたびに、いたたまれない気持ちになる。

なぜ最悪の被害が起こってしまったのか。尾根を一つ越えただけの隣の小学校では、2階建ての校舎屋上を越えて屋上のコンクリート壁をなぎ倒すほどの津波に襲われたが、学校にいた児童は裏山に逃げ、一人の犠牲者も出さなかった。

大川小学校への津波到達は、地震の揺れから約50分後。「なぜ逃げなかったのか。現場でどんな判断があったのか」。遺族は学校や市教委に問い続けているが、当時現場にいた

教職員のうち生存者は1人だけだったこともあり、市教委の説明会が繰り返され、学識経験者らによる第三者委員会で検証が行われたが、肝心の答えは出ないまま時間がだけが過ぎていった。遺族の一部は震災から3年を迎える前日の今年3月10日、「避難の必要性を認識できたのに、津波襲来まで約50分間、児童らを校庭に待機させて安全に避難させる義務を怠り、死亡させた」として、石巻市などを相手に、損害賠償訴訟を起こした。

今回の震災の特徴の一つは、地震の揺れから津波の到達まで、数十分の時間があつたと。高台に逃げようと準備をしていた校庭で、ここなら大丈夫だろうと上がった会社の屋上で、避難しようと思ったバスで……、命が失われた現場はさまざまだが、学校や会社などの避難の問題点を指摘しながらも、お会いできた多くの親が、「自然災害なのにいつまでこだわるのか、とお思いでしょうが」と、自らを責めるような言葉を口にした。

大川小の遺族の一人も、「こんなことやっても子供が帰って来ないむなしさは、十分に分かっている。どんどん新しいことを始めている人もあるのに、いつまでも何やってるんだ、と叫びたい、狂ってしまいたいような夜もある。でも、このままじゃ、乗り越えることなんてできない」と、絞り出すよう語ってくれた。

乗り越える必要

仙台支局での日々は、何をどれだけ書いたところで、被災地の現状を伝えるには、果てしなく不十分であることを、感じさせられる日々だった。

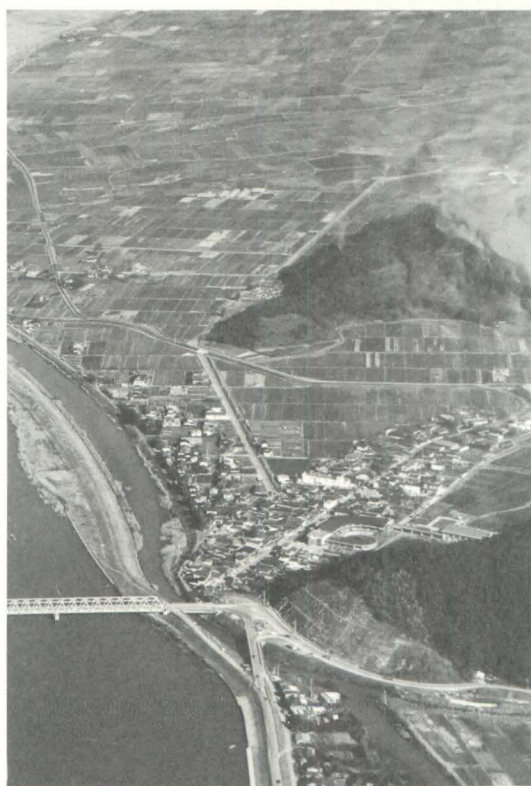
文字で伝えるには不遜なほどの修羅場をくぐったうえで、前を向いて新たなことを始めている被災者は多い。家を、職場を再建し、新しい取り組みを始め、祭りなどを復活させ、

被災地から笑顔を届ける。そんな被災者は、数えればきりが無いほどいる。ただただ、頭が下がる。

しかし、そうでない人も決して少なくない。失ったモノの大きさを考えればそれは当然のことなのに、時間が止まったままになっている気持ちに声にできない。

その声にできないということが、余計に自らを小さくしてしまい、更に言葉にすることが難しくなる。人間誰しも、逆境に際しては、強くありたいと願うと思うが、それが現実になった時、体も心も、思い通りになるだろうか。自らを省みると、とても「前を向ける」自信はない。

3年という歳月は、ある人にとっては「癒し」や「前を向く」のに十分な時間なのかも



右が震災前、左が震災後の大川小学校周辺。
右写真中央下の半円形の建物が大川小学校。
左右を見比べると、学校以外の建物が全て流
され、写真上部の田畑だった部分がすっかり
冠水してしまったことが分かる（宮城県石巻
市内で掲示されていた航空写真）

しれない。しかし、ある人にとっては、それは、喪失感でぽっかり空いた穴に、怒り、孤独、諦めを充満させるための時間になってしまったのかもしれない。

悲しみを「乗り越える」。よく使われる言葉だ。称賛の意味も込められており、本来悪い言葉とは思わない。もちろん、想像を絶する被災の中から「立ち上がり」「前向き」「乗り越えた」人は、称賛されてしかるべきだ。しかしその称賛は、そうはなれない人にとって、時に刃（やいば）にすらなることに、思いをいたさなければならぬ。

今、私たちに必要なのは、「悲しみをいつもそばで感じている」人をむやみに励ますのではなく、「乗り越えられなくてもいい」とのメッセージを伝えることだと思う。

まだ3年しかたっていない。



寺院紀行

東京・蔵前

かやでら
榎寺

撮影／小堀祐二

文／真山剛



榎寺の寺務所は本堂正面入り口左手にあり、日比野住職はこの寺務所右側の椅子でみなさんを待ち受けられている。左奥からかやの木会館につながっている

早いもので、この連載も今回のかやでら榎寺で百八か寺目となる。そして今度が初の女性住職のお寺への訪問となった。

編集部から最近も女性も僧籍をとり、尼僧寺院でなく普通のお寺の住職になる方が増えていると聞いたが、「榎寺の住職は尼僧住職のさきがけではないですか。女性が住職になることはなかったですからね」ということだった。

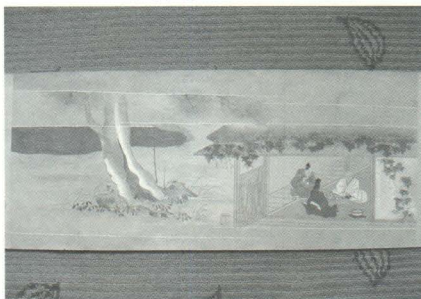
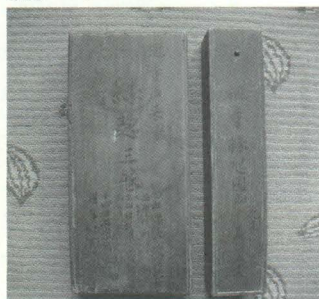
その榎寺を訪れたのは東京を二度目の大雪が襲った翌日で、榎寺は都営地下鉄大江戸線の蔵前駅から徒歩一分の駅前にあった。A5出口で地上に出ると春日通りの向こう正面に榎寺、左には隅田川に掛かるつもと厩橋となる。

本堂は昭和三十二年に建てられた鉄筋コンクリートの建物で当時としては大変珍しく、新聞に取り上げられている。その正面扉には大きな葵のご紋。金属細工の無形文化財の塩沢幹氏の手によるものだそう。今まで見た中で一番大きな葵のご紋だ。開山上人に由来するが後述する。そして本堂階段左手には全面ガラス扉の広々とした寺務所がある。寺務所内には右手にお線香も用意された受付があり、そこが住職の定位置。左手には打ち合わせ用のテーブルが二脚。正面の壁には榎寺の高灯籠と題された浮世絵が飾ってある。

この寺務所、春日通りに面して昭和四十六年に建てられた榎寺の施設であるかやの木会館の一階になっていて、住職の定位置からは

榎寺の縁起を記した榎寺縁起図画。
秋葉大権現と榎寺の住職が囲碁を打っている

榎寺の縁起三巻と縁起図画を納める
木箱



正面には本堂にお参りする人、右手にはかやの木会館への来客が確認できる、工夫された配置になっている。

さて、榧寺は江戸の中心、日本橋から浅草へ向かう街道沿いにある、その街道は今も江戸通りと呼ばれている。ちなみに蔵前という地名は徳川幕府が天領で収獲した米をこの河岸に運び、御家人に配給するため米俵を蓄えていた蔵がずらりと並んでいたことによる。

当時の蔵前では唯一だった浄土宗寺院である榧寺は大きな榧の古木脇にあった草庵を慶長四年（一五九九）に観智国師が浄土宗寺院として創建したお寺で、美しく清い水が溢れ池のようなところから池中山盈満院正覚寺と名付けられた。しかし、古地図には正覚寺の脇に榧寺の名が記されている。また葛飾北斎の浮世絵にも「榧寺の高い灯籠」と題されるぐらいで、榧寺の名は昔から江戸中に知れ渡っていたようだ。

さて、榧寺の由来を記した台東区指定文化財の絵図を開くと、戦国時代の頃、火伏せの神である秋葉大権現が山伏に化け、榧の実を賭けて榧寺の住職と囲碁を打つことから始まる物語が展開するが、興味のある方は榧寺のホームページを見ていただきたい。とにかく、秋葉大権現のご利益で火事の多かった江戸時代に、必ず榧寺門前で火が止まったという、ご利益あるお寺なのである。

なお、観智国師は増上寺の中興の祖であり、国師が徳川家康の帰



九代住職の時の大火で燃えた榧の木で彫られた秋葉大権現像

依を受けたことで浄土宗は江戸初期に一気に興隆した。つまり、今の浄土宗の礎を築いた名僧である。その観智国師の寺であるから本堂正面の扉にどこよりも大きな徳川の三つ葉葵の紋が飾られているのである。

さて、大きな葵ご紋のお寺、榎寺第二十四世日比野郁皓住職の話をお聞き。最初に取材時にいただいた経歴書から抜粋する。

榎寺第二十二世日比野在信の長女として誕生。

中学、高校、大学は跡見学園へ。同大学で英文を学ぶ。

大学卒業の年、父の在信が遷化。

二十五歳、イギリスとフランスに語学留学。

二十七歳、浄土宗僧侶の養成講座へ入行し、教師資格取得。

二十代三十代は東京仏教青年会、全日本仏教青年会、世界仏教青年連盟(WFBY)など仏教青年会活動に参加。WFBYバンコック本部事務局次長として活動。

平成十四年 榎寺第二十四世住職に就任。

現在、全日本仏教会国際交流審議会委員、世界仏教徒連盟人道奉仕委員会委員長、同日本センター運営委員、国際仏教婦人会理事。

日比野住職は団塊世代生まれで結婚歴はなし。大学卒業後の英仏



大正時代に養子先で虐待を受け、亡くなったお初。その供養のために建てられたお初地像。21代住職や玉川スミさんなどが建立した三つのお初地像が残っている。



女義太夫初代竹本綾乃助の墓。綾乃助は明治時代に一世を風靡した美少女義太夫だった。

留学で二か国語を身につけられ、全日本仏教青年会や国際的な仏教団体や世界規模の仏教組織に参加、海外にも飛び回られ、各種役職にも就かれています、ということだ。

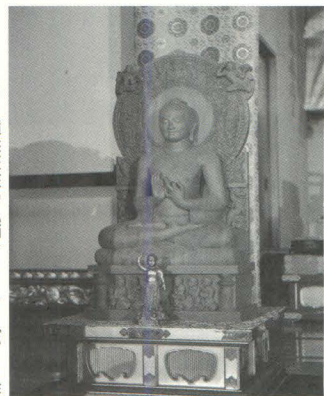
「幼稚園は深川の祖父のお寺が経営する双葉幼稚園、私はお寺の親戚が多いのですが、そうした知り合いの子供たちが集まっていました。小学校の思い出は、父が療養のために仮住まいしていた松戸の東漸寺、これも深川の祖父のお寺でしたが、わざわざそこまでテレビを見に一人で行ったことです。中学校からは私立へ通いました。

妹が一人の女の子二人でしたから、私は小さい頃からお寺のお手伝いを優先していました。今思えば、長女である貴方がお寺を護るのよ、とすり込まれていた訳です。そのころは尼僧寺院以外に女性住職はいないと言ってもよく、結婚して旦那様になる人をお願いするの……、と思っていました」

なるほど、榎寺を継ぐ道を歩かされ、それを十分に感じていたということだ。

「大学を卒業した翌月に先々代である父が亡くなりました。父は生まれつき心臓が弱く五十二歳でしたが、父の妹が兄の病気を治したと医者になったほどです。

父が亡くなると、父の兄である心行寺住職鈴木在定伯父が兼務住職となり、院代（住職の代わりをしてくれている僧侶）が法務を行



横浜在住の仏師、ソーマ・バラ作
の釈迦の初転法輪の像

うことになりましたが、悲しみと迷いの中で自分が何をどうしたら良いのか混乱していました。そして日本を離れることを考え、伯父に相談したところ快諾してくれました」

敷かれていたレールから一度飛び出してみたのである。

日比野住職はイギリスへ留学、さらにフランスに留学する。しかし、人生は面白いものだ。お寺を継ぐレールから外れた先で自らが僧侶となってお寺を継ぐ決心をさせられることになる。

フランス留学時にフランスの中学校で日本の伝統文化である茶道と華道を教えるチャンスを得た。もともとフランスは哲学が大好きな国で、ZEN（禅）は欧州全体で大人気である。父が仏教僧侶であると知ると、フランス人の教師や生徒たちからの仏教についての質問攻めにあつた。「私は当時（門前の小僧習わぬ経を読む）以上の何者でもなく、質問に答えられない歯がゆさを味わいました。日本では女性が僧侶となってお寺の住職になることは可能なのか等を質問されました」。今まで考えもしなかった一つの選択肢が示されたのだ。

そうしたある日、裁判所の前のカフェでコーヒーを飲んでみると、裁判所から次々と黒服に身を包んだ若い女性裁判官が颯爽と出てくる。その姿を見たとき、おぼろげに「日本に帰って私が僧侶となってお寺を継ぐことだってできるのかな」とフランスの地で浮かんで

1970年代に東京仏教青年会でカンボジアを訪れた時の写真。前列右から二番目が日比野住職



きた一つの選択肢を真剣に考え始めることになる。

日本に戻った日比野住職はさっそく尼僧住職の可能性を確認して浄土宗養成の道場に入り僧侶となったが、その頃はまだ尼僧は少ない、というか稀な存在だった。同じ道場の女性は六十歳代の元華族の方一人だけだったし、彼女は住職になる訳ではなかった。

最近では道場に入る二〜三割ぐらいが女性で増上寺では毎年十二〜四人の女性が僧侶になっているというから、驚くべき変化だ。

こうして住職になる資格をとったが、深川の伯父の住職の庇護のもとで、二十六年間副住職を勤め、その間自由に仏教の国際活動に力を注ぐことになる。そして住職になったのは十三年前だ。

僧侶になってからはお寺に一人でも多くの人に来てもらえるように様々な行事を行なってきた。お寺の活用を図ることは檀寺の伝統のようなもので、かやの木会館は当初から地元の会社の講習会や展示会、太極拳や茶道など、そして超宗派の浅草仏教会や婦人仏教会会場に使われ続けていて、葬儀場としては使用できない。檀信徒はもちろん、地元に開かれたとても珍しい会館だ。

さて、経歴からもわかるように檀寺には海の向こうの色々な宗派の女性のお坊さんも何人も訪れている。そうした住職ならではの話が聞けた。

世界の仏教を分けると、上座仏教（小乗仏教）、大乘仏教、チベ



檀寺の歴代住職墓

ット仏教になるそうだ。日本の仏教は大乗仏教の中でも特別な形をとっている。日本のお寺は一寺院に一家族が住んでいるからだ。日比野住職の話を聞こう。

「女性のお坊さんだと話しやすいのか、相談事は多いですね。です、カウセンシングの資格もとりました。ですが、皆さんには『念仏を称えろと仏さまの力が働きかけてくれ、上手く行くこともいかないこともすべて含めて心が軽くなりますよ。念仏は日常生活の中にあるもの、バスを待ちながらお念仏、洗濯しながらお念仏、デパートに遅れてくる彼を待ちながらお念仏……。楽しみながらお念仏を称えていると自分を変えられますよ』とこんな話を話しています。

今は平和な時代ですが、それでもどれだけ仏さまに助けてもらっているか。そんなことをひとりでも多くの人に伝えていくのが役割でしょうかね」

ずっと素敵な笑顔で応対していただいた日比野住職、こうした言葉にもその笑顔と同じ優しさと、女性ならではの視点が入っている。この魅力ある住職を誕生させることになった留学時代のフランス人の先生や生徒たちに感謝したい。

(ルポライター)

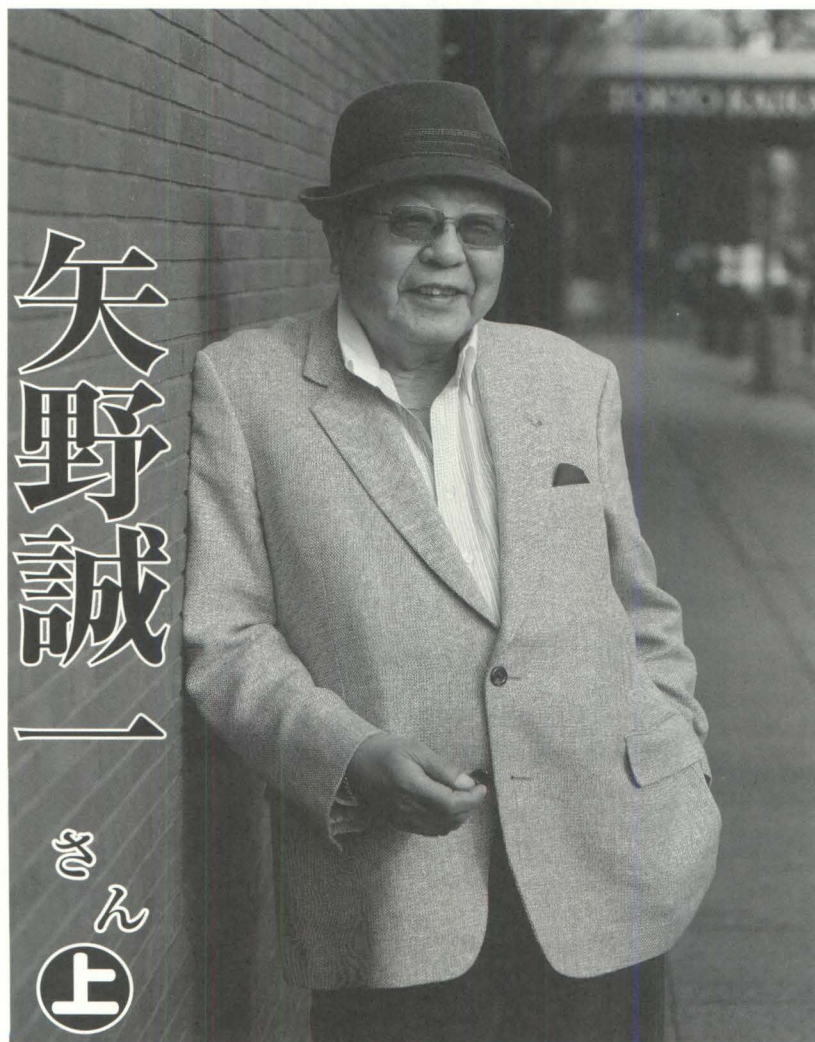


The Inauguration Ceremony of the International Ladies Association of Buddhism, April 11, 2009

現在日比野住職が活躍されているILAB（インターナショナル・レディーズ・アソシエーション オブ ブッディズム）の第一回総会集合写真。会場は孝道教団の本仏殿

連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

劇場の中や文学賞・演劇賞の会場で向うに矢野さんの姿を見かけると、すぐに寄って行つてかねて疑問に思つていたことを訊ねてみたくなる。それが私の楽しみでもある。

たとえば、「エノケン（榎本健一）の『最後の伝令』ってどんな芝居?」。すると即座に短くて明快な答が返ってくる。しかも話し方に喜劇役者や芸人たちへのあたたかさが感じられて、心にしみるものがある。たしか私よりちよつとお兄さんであるだけに、どうしてこんな昔のことをはつきり憶えているのだろう、とまた尊敬してしまふ。

最近旅先で改めてじっくり読んだ何冊かの中に「圓朝と春團治」「勇と馬楽」の項があった。

明治期にあつて「近代落語の祖」であり「近代文学の祖」でもあつた偉大な三遊亭圓朝の求道的でおよそ芸人らしくない立派な生き方に比べ、やや時代は下がるが桂春團治の生涯は実に反社会的、反道德的であつた。

と、矢野さんは書きながらもどこかで春團治のほうを舐蔑しているのがわかる。

また、文人吉井勇は伯爵家の出であるにもかかわらず、その奇行の数々によつて氣ちがい馬楽と呼ばれた二代目蝶花樓馬楽に多大な影響を受けた生き方をしている。その馬楽は句作をよくし、夏目漱石や志賀直哉、のちに久保田万太郎などにも愛顧を受けた不思議な魅力を持った人物だったらしい。

吉井勇の戯曲『俳諧亭句楽の死』は、馬楽の亡くなる当日に、その病状を案じながら数人で馬楽の芸や狂氣について語り合う一幕物で、その中の吉井勇らしき大学生がこう語る。「句楽は僕に如何して生きたら好いかつてことを教へて呉れたのだ。さうして僕はあいつの云ふ通りになつたのだ」

これが矢野さんの生き方とスライドするところがあると私には思へたし、また古今亭志ん朝の才能と人柄を大いに評価しながらも、ちよつと目茶苦茶なところのあつた立川談志

とより親交の深かった矢野さんという人が、
これではつきりしてきたみたいだった。
今さらインタビューというのも照れるほど

身近に感じる矢野さんだが、このへんでま
まった時間をもらってちゃんと話が聞きた
くなった。



立川談志師匠（故人）と語る矢野さん

何年前か前、私は「銀座百点」主催のパーティーで、亡くなる少し前の立川談志と矢野さんとが滅多には他人が入りこめない空気を漂わせてテーブルに向い合い、長いことボソボソと語り合っている光景を眼にした。

あのとき二人はどんなことを話していたのだろう。

「近ごろ誰と飲んでんの？ って訊いたら、『この間（石原）慎太郎さんから電話がかかってきて、狸穴に静かでない店を見つけたから出てこない？ って言われたけど、外はどしゃ降りの雨だし、わかりにくそうな場所だし、渋ってたら、それでもしつこく言うから車で行って、ひょいと見たら彼が雨中傘さしてじっと待ってた。寂しいんだね』なんて言ってたね。

『勘三郎にも、飲もう飲もうってよく言われるけど、要するにお前の芝居だけ観てればいいんだろ？ って言ったら、うん、まあね、

でもたまには玉さん（坂東玉三郎）のも観てやってよ、なんて言ってたね』って。

『二人ですつと話しこんでるものだから、まわりが気を遣っているいろいろ食べ物を持つてくるんだけど、これ、みんなどういう味か眼ではわかるんだけど、箸をつける気にならない。俺はもう死にたいんだけど、なかなか死ぬのって難しいね、って言うから、落語より難しいかい？ って訊いたら、そりやそうさあ、って笑ってた。

あれから何か月もしないで亡くなって、お葬式のおきおかみさんに会ったら、あの会でお目にかかったとき、声が出てましたか？ そのあとじきにしゃべれなくなつたんですよ、って言っていた』

あのとき二人であんなにしゃべったのに、言い損ねて心残りだったことがあるんだ。それは、同世代の落語家は数多くいるけど、僕が認めて一目も二目も置いているのはあんただけだよ、っていうこと。多分彼にはわかつて

いたとは思うけど、それでもちゃんと言葉に出して言つてやればよかったな、と思つてね。きつと彼も寂しかったんだろうからね」

談志と知り合つたのは矢野さんが二十五歳、六十年安保闘争のころで、まずは三遊亭全生を名乗つて二ツ目だつた先代圓楽と知り合い、その紹介で柳家小ゑん時代の談志を知つて、急速に親しくなつた。

「ボクシングを観に行つたり、昼間どこかで出遭つてお茶飲んでずつとしゃべつてたり、かと思つと突然、湯へ行こう、つて言い出して、あのころ彼とはよく銭湯へ行きましたよ。石鹼と手拭いそこで買つて入るんだけど、今でも不思議なのは彼には石鹼を泡立てる得意技があつてね、ブクブクブクブク漫画みたいにアブクを立てる。どうやるのかと思つて真似してみるんだけど、悔しいけどこれがどうやってもできないんだ（笑）」

尋常とは言えない道を歩き始めた二人の若者が、明るいうちから銭湯に入つてやたらに

石鹼を泡立てるといふ情景が、妙にリアルな映像として迫ってくる。

矢野さんは昭和十年三月、東京渋谷の代々木八幡神社の近くで生まれ育つた。

「作家の平岩弓枝さんのお宅が八幡様で、うちはその氏子ですよ。僕がまだ小さいころはお祭りだと社頭の広場にサーカスなんかが来てたもんです。

僕の家は祖母が建てた家で、茶人だつたから数寄屋造りだつた。庭を隔てたすぐ隣りに第三次内閣まで率いた近衛文麿のお妾さんが住んでて、その人がときどき祖母のところへお茶を習いに来てましたね。近衛さんがやってくると、うちの女中が台所で聞き耳を立てるらしくて（笑）、ラジオと同じ声ですね、なんて言つて、祖母からたしなめられたりしてました。

終戦後、近衛さんがA級戦犯になつて、拘留を前に服毒自殺をすると、いつの間にかお

妾さんもなくなくて、そのあとに一族郎党引き連れて越してきたのが天下の二枚目長谷川一夫ですよ。僕は国民学校六年生だった」

それがのちに矢野さんの著書『二枚目の疵』につながるのか。ちなみに、早生まれの矢野さんは入学も卒業も「国民学校」という唯一の年代なのだそうだ。

「そう、終戦直後はまだ木炭自動車が走ってましたからね。しかし長谷川一夫は運転手つきの自家用車で颯爽たる大スターでしたよ。たまに庭先でゴルフの練習をしたりね。それより耳新しかった言葉は、ときどき聞こえてくる『お疲れさま』っていう挨拶。今でこそ夕方の電車のアナウンスまでが『通勤お疲れさまでございます』なんて言ってるけど、昔は芸能界とか水商売の人たちしか使わない言葉だった」

そう言えば終戦後の東京劇場で名脇役の市川荒次郎（顔が長いのでこれも古い言い方の「なんきんまめ」）という渾名で呼ばれていたが、

さしたる仕どころもない役で引っこむときに、大向うから「御苦労さま！」と声がかかったのを憶えている。

「昭和十四年に撮影された火野葦平原作の『麦と兵隊』という小杉勇主演の映画は、僕のはのちに銀座の並木座で観たんだけど、その中で端役の兵隊たちが『お疲れさま』って言いつつておかしかった。考えてみたら大部屋の俳優たちが普段自分たちが使ってる挨拶をアドリブで言っちゃったんだね（笑）」

小杉勇の名を聞いて、私は『鳥居強右衛門』という映画を国民学校の校庭で観たことを不意に思い出し、矢野さんに言うところ、その映画は知らないという。一つでも彼に知らないことがあるのが嬉しくなって、説明した。

戦国の世、三河の長篠城が武田勝頼に包囲されたとき、奥平信昌の家臣の鳥居が夜陰に乗じて城を脱け、徳川家康に援軍を請いに出て主命を果たすが、その帰路に敵に捕らえられ、「援軍は来ないとみんなに報告すれば許

麻布高校三年生当時の矢野さん。



「す」と言われて隣柱に掛けられるが、大声で「すぐに来るぞ」と味方を励ましたので、無惨に刺し殺される。

「うーん、小杉勇は名優だったけど、晩年は長いこと病氣勝ちだった。小沢昭一さんの盟友で秀れた演出家だった早野寿郎氏が脱疽で

天折したのに何日か遅れて亡くなったとき、新聞の扱いは小杉勇がうんと小さくて僕は複雑な思いだったことを憶えてる。晩年は仕事してなかったから、もう新聞記者がよく彼のことを知らなかったんだろうね」

話はそれだが、長谷川一夫の左頬の疵は昭和十二年、東宝移籍の直後に起きた事件によるもので、当時京都の新聞が号外を出した。そのころ人気最高の歌舞伎役者十五代目羽左衛門が「俺が死んでも号外は出めえ、豪儀なもんだ」と感心した、という話も私は矢野さんの本で知った。

矢野さんは果たしていつごろから芸能どっぷりの道を歩き始めたのだろうか。

「典型的な山の手の家庭で育ったから、小学生のころは母親にたまに戦意昂揚の映画か何かに連れてかれて、帰りに銀座で食事をする、っていう程度だった。親戚の家で初めて聞いた落語のレコードが誰か演ってたのか知らな

いけれど『花色木綿』だったことはよく憶えてる。あのまま中学も山の手だったらもつと違った人間になってたかもしれないけど、たまたま入った麻布中学が僕の不良化第一歩でね（笑）。何しろ旧制から新制に切り替わった年だから、五年で卒業してもすぐに行き場のなかった連中に、学校が三階の物理教室を開放してて、そこにたむろしていたのが名うての小沢昭一、フランキー堺、加藤武、大西信行……といった無頼漢の面々だから、学校側も三階には近づくな、とおふれを出したほどだった。同級には倉本聰や西武の堤義明がいたしね。

とにかく下町の子というのは、小さいときから親に連れられて芝居だの寄席だの相撲だのへ行ってるわけだから、それが何ともかっこよくて粹に見えてね。たちまち感化されて悪所通いが始まった。ズツクの学生鞆肩に掛けて専ら映画館通いから始めたね。先生が呆れて、お前は学校の帰りに映画館に寄るんじ

やなくて、学校にちよつと寄つて映画へ行くんだな、つて（笑）」

最初に熱を上げた女優は『摩天楼』などのパトリシア・ニールだそうだ。

「映画研究部というのに入って、生意気にガリ版刷りの機関誌に女優論を書いたりしてね。今でも書き出しを憶えてる。『パトリシア・ニールは男物の腕時計の似合う女優である』っていうの。額が広くて知的な感じの大人っぽい女優だね」

高校に進学すると、「新劇」にも通うようになった。民藝では『その妹』や『炎の人』が手始めというのも私とお揃い。

「三越劇場で武者小路実篤の『その妹』を観て、滝沢修、宇野重吉、それに元宝塚の小夜福子を知った。そのあとどきに新橋演舞場で三好十郎の『炎の人』初演の初日を観たんだ。今でこそ新劇にも連日カーテンコールがあるけれども、あの時は初日と楽日しか舞台挨拶というのをしなかったんで、同じ料金

を払ってそのほうが得するように思ったから、それで初日に行ったんだね。あのとき演舞場の三階席は木製のベンチみたいな椅子で、百円だった。

で、『炎の人』。画商のタンギーと朗読をつとめるはずだった宇野重吉が病氣休演して、代役が加藤嘉だとばかり長いこと思っていたけど、あれは芹田伸介だったというのをあとで知った。それでカーテンコールの誰かの挨拶に、『重ちゃんが泣いて悔しがっております』っていうのがあった」

私が観たときのタンギーは宇野重吉だったから、多分再演のときだったのかもしれない。ゴッホの描いたタンギーの肖像にあまりによく似た扮装で、息を飲んだ覚えがある。細川ちか子がモデル役で、本当に脱いでいたのにもびつくりさせられた。

「そうね、チエーホフの『桜の園』のラネーフスカヤ夫人は、俳優座だと東山千栄子で、民藝だと細川ちか子だったね。このときのガ

ーエフ（ラネーフスカヤの兄）は清水將夫だった。あの芝居は本当はガーエフが主役じゃないかと思う。だってあの総領息子がしつかりしてないから先祖伝来の桜の園を手離すことになるんだからね。いよいよ桜の園が競売にかけられるっていう日、元小作人の倅で成金のルパーヒンと一緒に町へ出かけてって、結局ルパーヒンの手に渡るんだけど、帰ってきたガーエフの第一声が、『あそこまで行ったんでアンチヨビとニシンが買えた』っていうんだ。いかにもノホホンとしたお坊ちゃんらしいせりふだよね。

民藝も、清水將夫とか演出家の菅原卓とか、ああいう都会的センスの男が早く亡くなったというのが一つの不幸だった気がするね」

矢野さんは充実した芸能観賞生活を送った結果、大学受験は当然うまくいかず、一浪して翌年お茶の水の文化学院を受ける。

「あそこは学課試験がなくて面接だけだった

聞いたんでね。試験官にこの学校を選んだ理由を訊かれて、僕はあまり勉強する気はなくて、自分の好きなことをやりたいものですから、って答えたら、『お前、いい度胸してるな、でもそういう学生がほしいんだよ』って入れてくれてね（笑）。卒業までずっとこういう自分のペースは崩さなかった」

だから固い会社に就職しようなんて考えはさらさらなかった。

親しいつきあいになった同世代の全生（先代圓樂）や小糸（談志）、それに林家照蔵時代の春風亭柳朝（これも故人）などと飲み歩き、いろいろ落語論を戦わすことのできるのが楽しくて仕方がなかったらしい。

「それが仕事らしい仕事に結びつくのは、昭和三十七年、開場したばかりの内幸町のイイノホールを根城にした『精選落語会』のプロデュースをまかされたことで、僕と落語界の直接のつながりはここから始まるんです。

それです。当時望める最高の大看板、桂文

楽・三遊亭圓生・柳家小さん・林家正蔵（のちの彦六）・三笑亭可楽を選んでレギュラーに決めて、その前をつとめる若手も厳選しようということになって、例の全生・小糸・照蔵のほかに、馬生・朝太（志ん朝）兄弟を加えて、万全の態勢が整った。それというのも全生の圓樂さんが大師匠の家を一軒一軒ついで廻って歩いてくれたからなんです。そうでなければ僕みたいな若造が、こんな豪華なメンバーを集められるわけがないからね。

それでこのホール落語のハシリみたいな落語会は、社会的には大成功したわけだけど、興行的にはそうとも言えなくて、六十万円の大赤字を出したこともあったからね。当時の六十万といえば大金ですよ。その返済のために、新聞雑誌に署名無署名かまわずに書きまくって、月三百枚書いたこともあったからね。やっぱり若かったんだね」

その頑張りや、やがて矢野さんの出世作『志ん生のいる風景』につながって行く。（つづく）

こころじっぽう
響流十方

ねんしょう
念声は是れ一なり。

（法然上人『選択集』第三章）

ねんご
念は声に、声は念を

「バカもーん！」

多くの日本人の心に刻まれているであろうこの台詞せりふの声の主、声優永井一郎さんが急逝した。亡くなるつい数日前まで、アニメ「サザエさん」の収録をしていたという。昭和四十四年の放送開始から実に四十五年間にわたり、私たちを楽しませてくれた。享年八十二歳。

逝去二週間後、いつもの日曜と同様、夕餉ゆうげで家族と観た最終放映はもちろん、ふだんの「磯野波平さん」だった。それだけに、淋しさもひとしお強く感じた。波平さんのみならず、人気アニメ、映画の吹き替え、そしてシリアスなものから娯楽ものまで、幅広い番組でナレーションもされ、視聴者を画面に惹き付けてきた。氏の声を何の番組で耳にしても「あつ、カツオのお父さんの声だ」との会話が、筆者の家の食卓でも交わされた。

上手く表現できないが、独特の、しかしどこかホツとする、あたたかさの滲む声質と話し方が、「バカもーん！」というほんの短い一言を、国民的名台詞へと押し上げた。

「名は体を表す」というが、声もまた、そうした性格を強く持つものかもしれない。「元祖波平さん」がいなくなつてあらためて実感している。

ふと思った。声を発するということに対して、ふだんあまり、いやほとんど意識することはないな、と。

「そういう話し方じゃ、相手の人は誤解するかも」

などと家人から指摘されたり、後になって自分で気づきハツとしたりすることはあるが、意識するとしたらそんなときくらいなものだろうか。声を出す＝話すことなどあたりまへと、気づかぬうちに傲慢になっていたかもしれない。

本来、相手を蔑む意味をすら含む「バカもーん！」を、むしろあたたかい、愛情溢れるそれへと昇華せしめたともいえる氏の功績は、台詞のひとつひとつを大切にされてきたことに裏打ちされているにちがいない。その結果として、あの磯野波平というキャラクターが完成されたのだろう。

あたりまえかもしれないが、声の主が氏でなければ、磯野波平はまったく別な人格として私たちの前に現れていたはずだ。つまり「声＝話す」とは、ここまでの影響力を持ち得るものだということなのだ。

ここでふたたび、「声を出すこと」についていえば――。

仏教においては、身口意三業しんくういさんごうのうちの口業にあたるが、そこにあらためてスポットを当て直したのは、ほかならぬ法然上人であった。

「身」と「口」と「意」とによる、私たちの三種の行動に連関性のあることは誰もが認めるとしても、上人は、「口」と「意」のはたらきに対して特段に注目し、經典の所説から双方の同一性を確信、「念ずること」と「声に出すこと」とを「是一（これ、一なり）」と結び付けた。衆生が仏にすがり、その思いを託して仏の名を呼ぶことと、その名の体（仏）を念うことは同一即時的であるとして、上人在世当時に巻き起こっていた、仏道修行と念と声との優劣論に終止符を打った。

現代は声によるコミュニケーションを避ける傾向があるという。おそらくその大きな要因となっているであろう、メールやさまざまなSNS（ソーシャル・ネットエワーキング・サービス）など、インターネットを介したコミュニケーションの隆盛を今さら否定してみても仕方がない。

それはそれとしても、声はすなわち自ずから念をはぐくみ、念がすなわち声となつて生きたメッセージとして相手に伝わる、このことを心に刻んでおきたい。

永井さんの後任が決まった。元祖波平さんを受け継ぎつつも、どんな新・波平さんを演じてくれるのか、楽しみである。

（小村正孝）

蓮

門

句

会

第一回

勝崎裕彦

(東京新宿・香蓮寺)

花まつり天上天下もうきうきと

億万の子等を見守る甘茶仏

なごやかな笑顔語らい御忌の春

山崎龍道

(熊本天草・遣迎寺)

御遺訓くり返し読み法然忌

阿弥陀佛と向ひ合はせに甘茶佛

白象は手書きでありし花まつり

テーマ 《御忌・花まつり》

行正明弘

(福岡糸島・正覚寺)

法然忌ほころびそめし頭陀袋

御忌の衆愚痴もねぶつもお斎腹

復元も成り本山の法然忌

佐山哲郎

(東京根岸・西念寺)

谷深き寺に枯淡の花御堂

裏堂に光の楕円仏生会

飛花落花やがてお練りとなる時刻

最終回

江戸を歩く



江戸城を歩く

森清鑑

大江戸ウォーカー

江戸は未開の地

家康が秀吉の命令で武蔵国に転封されたのが一五九〇年。そして秀吉の死が一五九八年（慶長三年）。それから十六年後の一六一四年（慶長十九年）に大坂冬の陣、翌一六一五年（慶長二十年）が大坂夏の陣。豊臣氏は滅亡し、徳川幕府による本格的な統治が始まったのである。ところが家康は一五九〇年江戸入府と同時に嘗ての日本では見られない大規模な、幕府政治の中心地を築くべく、大工事に着手しているのである。構想極めて大。家康の偉大さを彷彿とさせる。

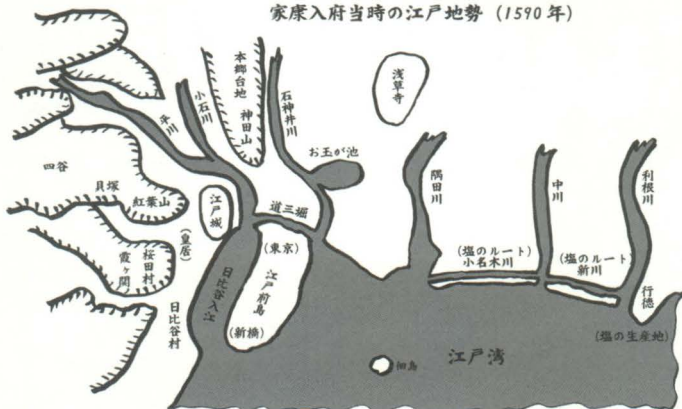
家康が初めて武蔵国に来た一五九〇年、江戸の地勢はいかなる様子であったのであろうか。まず江戸湾が大半を占め、佃島は海洋の孤島、ぼつんと離れた海の中。江戸前島（大手町から新橋まで）が半島のように突き出ており、その西側に江戸湾の入り江が入り込み（日比谷入り江）、入り江の北側に粗末な江戸

城があり、入り江のさらに北側から西、南へと囲むように神田山から続く山の手台地が在り、山麓の谷間を縫って平川、石神井川が日比谷入り江に注いでいる。神田山の東には「お玉が池」が拡がり、隅田川は海の入江のように幅広く、周囲は陸化した土地（湿地帯）が拡がり、そこから東の一带（深川方面）は完全な低湿地帯で、江戸湾がぐんと小名木川まで迫っていた。

家臣総出の土木工事から天下普請へ

そのような未開の地に家康は家来約一万人を連れて来たのである。当然、城の

家康入府当時の江戸地勢（1590年）



周囲に家来が住む場所は限られていて、日比谷入り江周囲の僅かな陸地があるのみ。屋敷を建てようにも土地が無いため、やむなく点在する民家に頼む、あるいは粗末な小屋のような家屋を造って住まわせる有様であった。家来達をそこから江戸城に通わせたのである。

彼らは江戸城を見て驚いた。西国の城とは、高い城壁に囲まれ、豪壮な天守閣や隅櫓が聳えている。そうした姿を見慣れている家来達にとつては、これは城などといえる代物ではない。盛り土に竹木が茂り、その上に砦とりでのような建物があるだけ。側近の本多正信などは、せめて玄関だけでも造りましようと言言する。しかし、家康は、「要らざる立派だては無用」とこれを一笑に付す。城など後回し。まずは食料の確保である。とりわけ、塩は基本的な食品。塩と言えば、行徳の塩田がある。そこで家康は、行徳まで東に一直線の運河を掘削する。家来達は刀から鋤鍬を手にし、土方に

なる。まず日比谷入り江に流れ込む平川の流れを変え、道三堀を掘り、隅田川へと直結。隅田川を渡ってさらに直線的に運河を掘り中川に繋げる。これが小名木川である。すぐ側まで江戸湾の波が迫っている。そして中川に出ると、その先さらに行徳までの直接ルートを作り開く。塩田拡大。豊富な塩が常時入るようになる。塩に続いて膨大な農作物が運び込まれるようになる。

それから、江戸の土地大改造に着手する。まず、平川、小石川、石神井川の流れを変え、浅草橋から隅田川に流す、神田川放水路の大工事。これにより、洪水を防ぐと共に外堀となす。後に江戸の水源ともなり、重要な運搬経路ともなる。さらに、神田山を初め、周囲の山々を削り、平地にすると共に、日比谷入り江を手始めに、江戸湾を埋め立てていく。家臣達は総出で慣れない鋤鍬を振り上げ土木屋と化す。この大工事に全国から人々が江戸に集まってくる。こうして居住地を広げ、家

臣団の広大な屋敷の割り当て、町地の創設が行われ、ついに日本最大の規模を誇る江戸城の建設に着手する。

江戸城構築

江戸城の原点は一一八〇年江戸重継、一四五七年太田の居城にある。しかし、それらは砦のようなもので城郭などと呼ばたものではない。天下普請は幕府開設の三年後から始まり、第一次工事が一六〇六〜一六〇七年頃、第二次が一六一二〜一六一五年頃、第三次が一六二〇年。以下、第五次まで続く。城郭が完成し、町地が整備され大江戸の原形ができる。迂回した平川、小石川の流れを利用し、南の大きな溜池と繋げ、外堀を完備する。一六〇六年本丸御殿、二の丸、三の丸を築造。一六〇七年天を突く五層の大手守閣ができる。その後も造営、改築が繰り返され、寛永一三年（一六三六）江戸城の総構が完成する。この前代未聞の規模と精緻な建築物の完成に要した期

間は実に五十年。家康から始まり、秀忠、家光と三代の将軍に及ぶ。家康の構想の大きさを物語るものである。

江戸城の存在をさらに大きな視野で見ると、南に二十五万坪に及ぶ増上寺を、北の上野の山に寛永寺を擁し、江戸城南北の鬼門封じと砦としての大構想を見て取ることができる。

外堀を歩く

増上寺から江戸城の外堀に沿って一周してみよう。増上寺大門を左に見て東海道を北上る。浜松町一丁目、神明町、そして芝口三丁目。東海道の両側は町民の住宅がびっしり。町地の左右は全て大名の上屋敷。右側約三万坪に及ぶ会津松平容保中屋敷に続いて二万六千坪の伊達家上屋敷（汐留）。屋敷の東側に汐留川が流れ、その海沿いには、広大な浜御殿がある。芝口一丁目が終わると、外堀に芝口橋（中央通り、銀座八丁目交差点、旧東海道）が架かっている。堀に沿って道が造られ

ており、芝口橋を渡らずに堀に沿って右に歩けばすぐに汐留橋。ここで堀は二つに分かれ、南に行けば浜御殿、北に行けば三十間堀（歌舞伎座三原橋交差点を銀座より入った南北の道）。芝口橋から左に行ってみよう。右手に外堀を眺めながら少し歩くと幸橋。堀の向こうにいかめしい幸橋御門が見えている。さらに進むと新シ橋（外堀通り、虎ノ門右の西新橋一丁目交差点付近）。これを過ぎると堅牢な虎御門（虎ノ門交差点）。虎御門を経ると外堀はちよつと南に下り、溜池に直結する（金刀比羅神社前）。ここまで外堀を挟んで両側には大名屋敷がびっしり。ここから外堀沿いの道は、溜池南縁に細長く続く稽古場（弓の稽古場）に沿って行く。やがて溜池の対岸向こうに広い日吉山王大権現社の杜が聳え、赤坂田町一丁目を過ぎると火除け場が拡がり右手に堅固な赤坂御門が見える。さらに行く。と紀伊国坂の登り。右下に流れる堀の向こうには、広い井伊直弼の中屋敷（ニューオータ

二）や尾張中納言の拝領屋敷（上智大学）が望める。その間に紀尾井坂が麹町に向かつてのびている。紀伊国坂を登ってさらに行くと、右手に四谷御門が見える。これを過ぎると次が市ヶ谷御門。左を振り返ると、広大な尾張中納言上屋敷（防衛省、旧陸軍士官学校）。さらに北に歩くと牛込御門。この辺り旗本、御家人の住宅がびっしり並んでいる。そして江戸川が外堀に流れ込む船河原橋に出る。堰から水が流れ落ちる音が聞こえる。ここを江戸っ子は通称「どんどん」と呼んだ。ここから外堀は東に蛇行し小石川御門を経て神田川となり、水道橋、お茶の水を経由。昌平橋、筋違の御門を渡ると、川の右手に柳原土手が連なる。この土手沿いに歩くと浅草橋、浅草御門に到着。そこからは両国広小路が拡がり、柳橋が隅田川沿いに架かっている。このように外堀は、江戸城の外郭を構成している。では、隅田川、江戸湾に至る江戸城東側一帯の堀はどうであろうか。ここは縦横に堀や川が

巡らされており、川は物資の水運搬だけでなく、堀の役目も担っているのである。そこで、江戸城東側の、城に最も近い外堀を歩いてみよう。

城の北側、九段坂下、俎橋、飯田川を下ると雉子橋に出る。一橋御門を潜る（一橋）。堀の左は広大な明地が拡がり（神田錦町）、右は一橋慶喜の上屋敷。神田橋御門（神田橋）を潜ると左に鎌倉河岸が続き、竜閑橋が見えてくる。竜閑川が堀に注いでいる。南に回り下ると常盤橋が見え、枳形御門がある。左に金座（日本銀行）。外堀は広がり、堀と川が交差する。右に道三堀、左一石橋から日本橋。この外堀交差を抜けると、すぐ呉服橋御門（呉服橋交差点）。堀の右側には北町奉行所があり、大名上屋敷が連なる（東京駅、丸の内）。右側は町人町が拡がる（日本橋、京橋）。まもなく、鍛冶橋御門が見えてくる（鍛冶橋交差点）。これを過ぎると左に京橋川が流れ込む比丘尼橋が見え、さらに下ると数寄屋橋。

右手に数寄屋橋御門があり、その裏に南町奉行所。これを潜ると堀幅はさらに広くなり、左手に山下御門（泰明小学校からJR東海道本線付近）。ここから外堀は二つに分かれ、一つはぐるりと回って日比谷御門から内堀に。もう一つはまっすぐ南に下がって幸橋御門に出る（第一ホテル）。ほぼ今日の外堀通りである。これを含め、城から江戸湾までの堀、川はほとんど道路と化している。

内堀を歩く

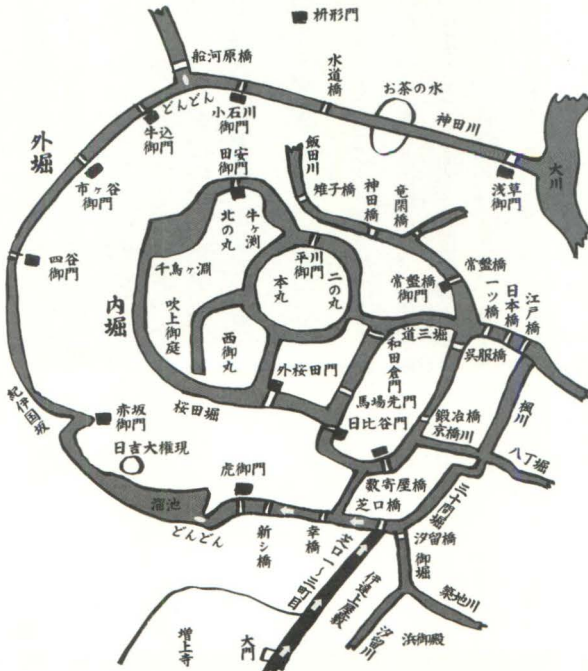
続いて大名にでもなった積もりで内堀時計回りで一周してみよう。日比谷堀に沿って西に歩くと、やがて外桜田御門が見え、桜田堀になる。堀幅は一段と広くなり、左側に広大な井伊家上屋敷が展開。さらに北に登ると半蔵御門。そして半蔵堀。これを過ぎると千鳥ヶ淵。そして北の頂点、田安御門。ぐるりと回って牛ヶ淵、清水堀を経て竹橋御門。さらに南へ大手堀、大手御門を経て桔梗堀。桔

梗堀から東へ和田倉堀があり、道三堀へと続く。和田倉堀から南に下る堀が馬場先堀。馬場先堀を南に下ると日比谷御門に戻る。馬場先堀の右側沿岸が八代洲河岸である。

さらに江戸城の中核をなす本丸、二の丸（家光以後將軍嫡子や生母が住み、本丸に準拠する館。現在、東御苑として一般に開放）を囲む内々堀がある。北の平川堀から時計の逆回りに三日月堀、蓮池堀。そして最南の蛤堀。ここから東側をぐるりと北に回り込こんで二の丸を囲む堀（宮内庁病院、皇宮警察本部）が内々堀である。

本丸の西南に、將軍の隠居所たる、広い西御丸御殿領（宮内庁）があるが、ここも内々堀に囲まれている。西御丸領には、北から、紅葉山、家康から始まる歴代將軍の御霊屋、西御丸大奥、西御丸御殿と続き、御領南端に架かる橋が、我々が皇居でお馴染みの二重橋である。また、西御領内西寄りには、道灌堀（現在、途切れ途切れにある）がある。そし

江戸城御堀外観図



て堀を挟んだ西一帯が吹上御庭（現在の御所）となる。このように江戸城は、幾重もの堀に囲まれていた。

江戸城の中樞部

大手堀を渡り巨大な枡形の大手御門を通ると大番所がチエツク。ここから御城。総面積実に三十万七千坪。広大な広場（皇宮警察）には家来が待機する腰掛があり、下乗御門に進む。ここにも大番所。馬を下りて内々堀を渡ると、再び枡形御門。くの字に左へ出ると長大な百人番所の館。周囲は巨岩を積み重ねた城壁がそそり立っている。ここから中の門を潜る。右に銅門が在り、そこから先が豪華な二の丸御殿である。左に行くと再び堅牢な新門が構えている。その先に蓮池堀の南角に美しい富士見櫓が聳えている。複雑な構造である。そして初めて御本丸に近づく。將軍謁見の大広間。將軍が座する上段の間。二十センチほど下がって中段の間。ここには御三家、

御家門が拝謁。さらに下がって下段の間。徳川氏譜代大名が坐す。さらに二之間、三之間、四之間と続く。ここには関ヶ原以後の臣従外様大名が坐す。大広間は五百畳の広さ。正月拝謁と言っても大名は顔も上げず伏している。將軍と顔を合わせることもない。続く白書院は、將軍が公的な行事を行う処。老中が政治上の意見を述べるところである。そして黒書院は、將軍が日常的な行事を行う処でいわば応接間。さらに数多くの間がある複雑な構造。その精緻で芸術性高い建築物には驚きのほかない。江戸の技術の粋を集めた建造物。ここで堅牢な仕切り壁があり、これより御本丸中奥に入る。広い中奥の果てはもう一つ銅仕切りがあり、將軍のみが入れる本丸大奥へと突き進む。これは家康の時代から家族との私的な生活を結ぶ場であったが、二代秀忠が表、中奥、大奥と明確に分け、三代家光の乳母、春日の局によって整備が整えられ、將軍が中奥から大奥に行く際には、御鈴廊下

で合図を送り開錠させ、初めて入れるようにした。大奥は二の丸、西の丸にもある。江戸末期の地図では、本丸の大奥は南北に伸び、連なる建物になっている。この大奥の北端の左に天守閣がある。この本丸だけで約一万千四百坪。この広い空間の全てと言って良いほど、建造物で埋め尽くされている。

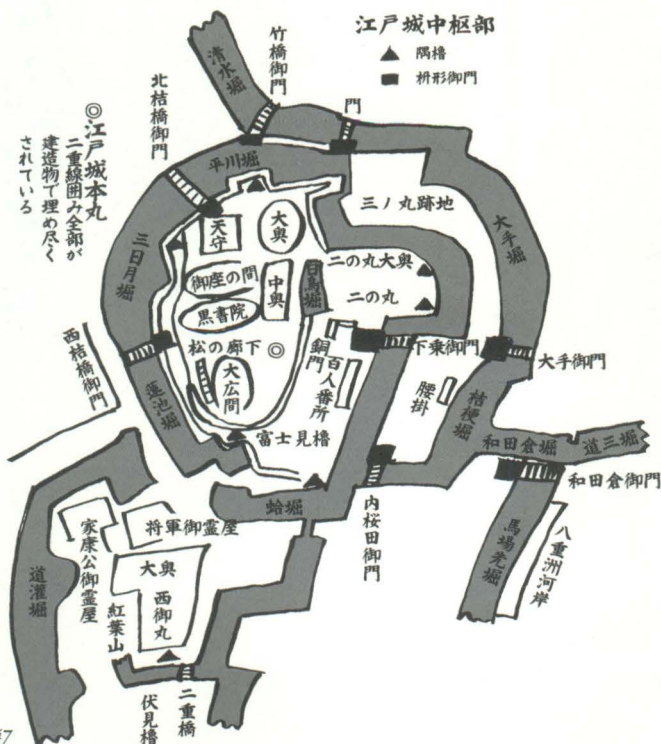
江戸城天守閣

最初の天守台は一六〇六年（慶長十一年）に構築され、翌一六〇七年天守を竣工。五重、五階。天守台を含めると高さ六五・四五メートル（国会議事堂並）。比類無き、豪壮優美な外観。次が一六二二年（元和八年）。そして最後の天守閣が一六三六年（寛永十三年）に完成した。つまり天守閣は三度、構築されている。構造は五重、五階（地階を含めると六階）。壁面黒色塗装、銅板張り。屋根は銅瓦。派手な外観。高さ三十間、下総からも眺望できた。三代將軍家光の時に完成。江戸中

から見渡せ、その偉容は江戸っ子の誇りであった。しかし、これも一六五七年（明暦三年）のいわゆる明暦の大火で焼失。以来天守台を残すのみで現在に至っている。

本丸、二の丸の、堀沿いの周囲は高い塀に仕切られ、内々堀の城壁の上をぐるりと囲むように立っていたので、その姿は城の全体像を映し出すように思えたであろう。加えて隅々に豪壮な隅櫓が建っている。最南の富士見櫓（三層）から北に行くと乾櫓、北をぐるりと回って北櫓、東櫓、巽奥櫓、さらに西丸御殿に行く蓮池巽櫓などである。これらは二重三重構造で天守閣のような姿をしており、その特徴はそれぞれどこから見ても美しい偉容と、美観を示していた。隅櫓は戦国時代にあつては、防禦に重要な見張りであり、応戦の砦であつたが、江戸時代では、それ自体が城のシンボルとなつたのである。

家康は一六一六年（元和二年）駿府城で亡くなり、遺言によつて久能山東照宮に葬られ、



「東京の地理が分かる辞典」 日本実業出版社 鈴木理生 著
「江戸城」 本丸御殿と幕府政治 中公新書 深井雅海 著

浄土誌上句会



● 円

〔特選〕
春陰や円空仏の薄笑い

長谷川 裕

木彫仏十二万体を目指して及ばなかったが、あちこちで接することができる。その大方は穏やかな笑みをたたえていて、誰にも親しみやすい。「薄笑い」と季語によって、この句の笑みはやや複雑さを感じさせるが。

〔佳作〕 円頂の禅僧囲み年酒酌む

佐藤 雅子

円卓に上座を示す冬薔薇

石原 新

闇汁に円卓囲む集いかな

中村 真一

● 光

〔特選〕
双胴船水尾に広がる夜光虫

浜口 佳春

船の進むにつれて伸びる航跡の広がりは、一本になることでその分広く、より複雑な姿を見せる。その水尾による夜光虫もそれに従

った光を生じているのだ。作者は船の後尾に
立って、その様子を見ているのだろうか。

〈佳作〉

光堂いま春月の暈の下

斉田 仁

円陣を組んでラガーの尻光る

小林 苑を

料峭の光を浴びて阿弥陀堂

千葉 由美

●自由題

〈特選〉

裸木に吊るされてゐる貸家札

柏木 貞華

この家は貸家札を戸口にぶら下げても、通
る人からは見えにくいのだろう。通りに近い
木にぶら下げてあるのだ。今は葉が散つて、
風にぶらぶら揺れているのがよく見える。上
の句の「裸木」も生きている。

〈佳作〉

補聴器に玉砂利の音初詣で

井村 善也

三代を住みたる路地や冬の月

山口 信子

病院の粥ではじまる七日かな

増田 信子



FORUM
浄土の広場

大髪自由題

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一四年四月二十日

発表・『浄土』二〇一四年六月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

誌上句会（編集部選）

■ 円

生まれし眸円やか和子の顔
円座した冬の蒲公英そつと触れ
円陣の真中にある福寿草
円空の足跡ありて春の村
円陣の解け冬萌のあらわるる
冬の虹円にはならずたち消えぬ
円卓の一輪差しや水仙花
冬薔薇円周率の果てしなく
初雀円を描いて去りにけり
ドーム下半円となる初日影
亡き祖母の楕円の鍋の牡蠣縮む
オレンジの円錐無数雪の道

森 懐人
當間あさ子
井口 栞
鳥羽 梓
月島恭子
浜口佳春
黄瀬 鴻
鈴木真理子
柿崎 歩
真野美佐子
金井庫助
新藤藍子

■ 光

軒深き水柱に朝の光差す
首都駅の光のドラマ輝かに
艶やかに光まといし寒椿
光満つ善導大師尊しや
春埃舞台に残る光の輪
一ヶ所が大いに光る冬林檎
冬の海光たくさん吸うレンズ
電波塔光りて雪の夜を照らす

佐藤雅子
森 懐人
當間あさ子
飯島英徳
内藤隼人
工藤 掉
金井 楨
宮間重紀子

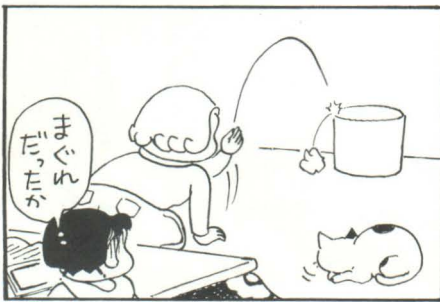
■ 自由題

インバネス知る人もなく売られけり
紅富士や湖面に映して爽やかに
一葉なく身軽となりし大銀杏
反戦や善導大師元祖詫び
紅千鳥それでは蕎麦屋までの道
石ひとつのせて二月のおまじない
セーターのふくらんでいるベンチかな
冬牡丹句碑の近くに植えられて
ハレーとその持主と日向ぼこ
北風のゴォーと吹く日に髪を切る
燈籠の隙間だらけの寒やかな
二ヶ月の巫女の緋袴ふくらみぬ
葉牡丹にマリアの名前青い空

佐藤雅子
森 懐人
當間あさ子
飯島英徳
内藤隼人
工藤 掉
金井 楨
宮間重紀子

さっちゃんはネッ

かまち♡おしろ



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。（静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞）

賑やかに僧衣の行列御忌の寺

岱潤

『日めくり説法』という本で、ひろさちや氏が山岡鉄舟の逸話を紹介していた。剣術家でもあり禅宗の僧としての有名な鉄舟の剣術道場に通う若い門人が、師匠をからかおうとこんな話をした。「私は毎日この道場に来る途中、その神社の鳥居に立ち小便をしているが、いつこうに罰というものが当たらない。こんな私にさえ罰を与えない神・仏など信ずるに値しない。すると鉄舟は雷を落とし、この馬鹿もん、おまえはすでに罰が当たっている。武士のおまえが犬や猫と同じことをするなど、おまえはすでに畜生道に

堕ちている」という話だ。この話に私は感動してしまった。三悪道に堕ちるとはこういうことだったのかと。善因善果、悪因悪果というのが、これももういうことだったのかと。悪いことをすると次の世では虫になるとか、地獄に堕ちるとか、六道輪廻からの脱却を説いたのが仏教の教えであつたはずなのに、そんな脅しを言うお坊さんが未だにいたことが不思議でたまらなかつた。善因善果、悪因悪果もいいことをするとそのうちいい結果がでるといふように、時間差をもつて説明することが多いが、それも間違いで、因果の間に時間差はないということを理解したとき、すべてが納得がいった。行

為そのものが問題なのだ。悪いことをしてしまふことも、その反対にいいことができることも、そのこと自体がその人物を表している。

(長)

※小説渡辺海旭は諸面の都合により休載させて頂きます。

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

八十巻四月号

頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年三月二十日

発行 平成二十六年四月一日

発行人

編集人

印刷所

株式会社

〒一〇五・〇〇一一

東京港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三七

振替〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安樂寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森嚴寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
舩博(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

泰雲の

文と写真

美味探訪

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年



神田・旧連雀老舗めぐり

今回は、神田旧連雀町をご紹介します。

旧連雀とは現万世橋と神田須田町一丁目、淡路町二丁目に囲まれた界限です。甘味処『竹むら』、江戸蕎麦『まつや』の行列を避けて、神田駅から須田町に向かって歩きます。昨年5月に惜しくも閉店したフルーツバーラーの『万惣』がビル解体準備中。ナンバーワンのホットケーキもう食べられないのが残念です。

明治35年創業の『神田志乃多寿司』。浅草や人形町にもありますが、神田志乃多が一番好きな味です。しっかりとした甘味で蓮根が入った長方形のいなりずし、じっくり煮込んだ干びょうと良質な海苔ののり巻きは東京の逸品。いなりずし3個とのり巻き3個の箱入588円～。差し入れにピッタリです。

数軒隣の洋菓子『近江洋菓子店』は明治17年に創業。レトロな包装紙に包まれたフルーツボンチ2678円は、大きな瓶にぎっしり詰まったフルーツが宝石のように美しい。喫茶コーナーでのイースティンも素晴らしい。525円のドリンクバーは、生フレッシュジュース、ホットコーヒー、アイスティー、ホットミルク、ホットチョコレート、ビーフ7野菜スープが用意され、他店のドリンクバーとは次元が違います。

大好きな町、神田のごく一部の紹介となりました。



『神田志乃多寿司』 東京都千代田区神田淡路町2-2 ☎03-3255-2525

定休日 火曜日 営業時間 7:30～18:00

『近江洋菓子店』神田店 東京都千代田区神田2-4 ☎03-3251-1088

定休日 無休

営業時間 月～土 9:00～19:00 日・祝 10:00～17:00

待望の書、刊行なる！

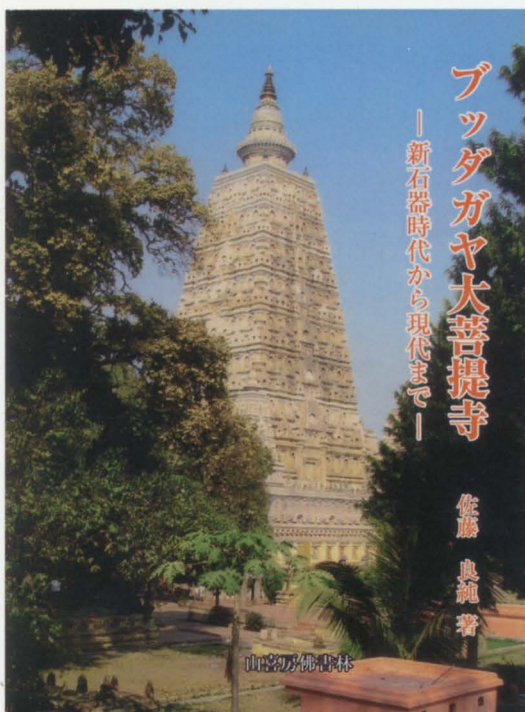
ブツダガヤ 大菩提寺

佐藤良純 著

ブツダガヤ大菩提寺

—新石器時代から現代まで—

佐藤良純 著



山喜房佛書林

ブツダガヤの歴史
全貌が明らかに！

山喜房佛書林

本体2000円